

## 消えゆく月：『千代曩媛七変化物語』の諸本

亀井，森  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/10338>

---

出版情報：文献探究. 39, pp.68-76, 2001-03-31. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：



## 消えゆく月―『千代ちよ代のうひめ曩しちへん媛げもの七変化物語』の諸本―

亀井 森

### はじめに

とにかくにたくみし桶の底ぬけて水たまらねば月もやどらず  
これは鎌倉末期の尼僧で京都尼五山の筆頭景愛寺の開基である千代  
曩が、美濃国の松見寺で出家の志をもって修行中、水をくむ桶の底  
が抜け落ちるのを見て大悟したとされる時に詠んだ歌である。

文化四年（一八〇七）、江戸書肆西宮弥兵衛（石渡利助と合板）  
より刊行された『千代曩媛七変化物語』は、この千代曩と夢窓国師  
の伝説をモチーフとして取り入れている。作者は振鷲亭。文政二年  
（一八一九）頃、泥酔の上、堰にはまり没したとされるこの作者の、  
円熟期に生れた読本である。

『千代曩媛七変化物語』は、主人公千代曩姫と俊季の恋愛を軸に、  
俊季妻荒あらたえ妙たえの千代曩姫に対する嫉妬、折檻など惨劇が展開するも、  
夢窓国師によって解放されるという筋立てであるが、好評を博した  
とみえ、以後数度の後印本を生んでいる。

従来、この『千代曩媛七変化物語』について、断片的な報告はあ

るものの包括的な諸本の整理はなされていなかったが、この度、九  
州大学附属図書館に収められる当該本が「九州大学附属図書館読本  
コレクション」としてネットワーク上に全丁公開されたのを契機と  
して、管見に入った諸本について報告したいと思う。

### 1 初印本について

『千代曩媛七変化物語』が西村弥兵衛から刊行されたことは、慶  
應義塾図書館蔵『画入読本 外題作者画工書肆名目集』（『西鶴  
研究と資料』 国文学論叢第一輯 至文堂 昭和三十二年）から次  
の様になる。

千代曩媛物語 五冊 振鷲作／北馬画 板元西宮弥兵衛

十一月廿一日出版売出申談

また、割印帳にも同様に西宮弥兵衛の名が見えるものの、公的機関  
において現存を確認し得る『千代曩媛七変化物語』諸本の奥付には  
板元西宮弥兵衛の名はなく、初印本の報告はなされていない。棚橋

正博氏は「振鷺亭年譜稿」（「読本研究」第十輯下 平成八年十一月）の『千代曩媛七変化物語』項（三十六頁）において次の様に述べている。

初板本の題簽・見返し・奥付は未見。書名は再板本の題簽に拠った。また画工については『小説年表』類に従い、画風を鑑み北馬とした。板元については巻末の著述目録中の『妹背山緒環策子』と『春徳磨誓車』は各『疎臥妹背山』・『俊徳丸』と考へ、その板元については『外題作者画工書肆書目集』に拠り西宮弥兵衛とし（後略）

また、槇山雅之氏は、「振鷺亭の半紙本読本三種とその創作方法」（「読本研究」同八十五頁）において、使用した『千代曩媛七変化物語』の初板について次の様に言及している。

『千代曩媛七変化物語』の引用は、中村幸彦所蔵本のマイクロフィルム（国文学研究資料館所蔵）に拠る。この本は刊記を欠くが、巻末の新刊予告に「右戊辰年間脱稿令発鬻者也」とあることから、文化五年（戊辰）中に刊行されたことが解る。挿絵に薄墨が使われていることから、初版と思われる。

挿絵（および口絵）に関しては後述するが、このようにこれまで確実に初印本と認定可能な板本は報告されていなかったが、高木元氏はその著『江戸読本の研究―十九世紀小説様式攷―』（一九九五年 ぺりかん社）の中で、初印本『千代曩媛七変化物語』（個人蔵）の表紙・見返し・刊記の写真を掲載している（四十六頁）。

九州大学附属図書館の「江戸読本コレクション」に収められている『千代曩媛七変化物語』（以下九大本）は高木元前掲書に掲載された刊記と同じものを有しており（資料1）、これらの刊記によって、

従来、割印帳や『外題作者画工書肆書目集』などの資料でしか指摘され得なかった板元西宮弥兵衛を確認することができたのである。

次に『千代曩媛七変化物語』諸本を比較検討してその先後関係および再印の回数について考察していきたいと思う。

（資料1）



## 2 諸本について

『千代曩媛七変化物語』の諸本は、文化五年版としてお茶の水女子大学・旧大橋図書館・尾崎久弥旧蔵本、嘉永七年版として早稲田大学のそれぞれの所蔵が報告され（『国書総目録』及び『古典籍総合目録』）、それらに加えて八戸市立図書館蔵本、故中村幸彦先生旧蔵本が確認されている（『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目

録』。文化五年版と嘉永七年版の二種類しかここでは示されていないが、棚橋氏は再印本について次の様に述べている。

初板本と本書刊行（筆者註―嘉永七年の再印本）の間に再板は  
何度か繰り返されたと思われるものの、該当する再板本は未見。

（前掲棚橋論文 三十六頁）

また、高木元氏は前掲書の中で嘉永六年版について言及している（七十八頁）。つまり既に文化五年初印本、嘉永六年版、同七年版の三本の異版の存在が報告されているわけであるが、今回の諸本の比較によってそれに加えて少なくとも二回の再印を指摘することが可能である。（資料2）として示した簡略な諸本対照表は表紙・題簽・書型・巻冊・見返し・匡郭・刊記・口絵のそれぞれの項目について比較したものである。次節において新たな異版の存在について私見を述べたいと思うが、そこには商業主義に翻弄されたひとつの口絵が、図らずも異版を解く鍵となっていたのである。

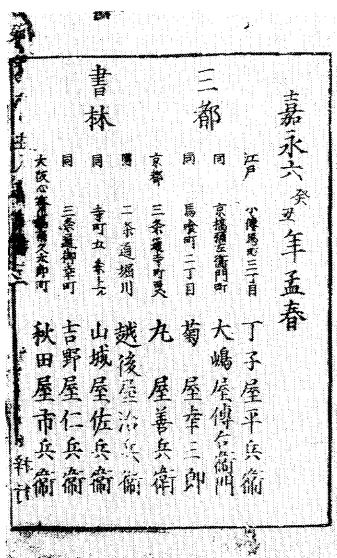
### 3 諸本の関係―口絵を手掛かりに―

（資料3）に示した刊記からわかるように、初印本の後印もしくは再刊を少なくとも三回は確実に指摘することができる。『国書総目録』などで「再版」とされる場合、刊行の年時が異なるだけで実は同板であるということは往々にしてあり、新たに板木が彫り代えられた本来の意味の再刊（再板・再版）と混用されている。その為、後印本や再刊本について言及する時、板本の奥付のみを問題にする

（資料2） 諸本対照表

| 所蔵者               | 表紙・題簽 (cm)                                    | 書型・巻冊 (cm)          | 見返し        | 匡郭 (cm)                            | 刊記 | 口絵 |
|-------------------|-----------------------------------------------|---------------------|------------|------------------------------------|----|----|
| 九州大学附属図書館         | ・ 橙色表紙<br>・ 中央刷 9.7×10.8                      | 半 5巻5冊<br>22.9×15.9 | 有          | 自叙<br>18.9×13.3<br>本文<br>19.3×13.6 | 有  | A  |
| 中村幸彦先生旧蔵<br>(紙焼本) | 九大本と同一<br>(色は紙焼本により不明)                        | 半 5巻5冊              | 九大本<br>と同一 |                                    | 無  | B  |
| 八戸市立図書館<br>(紙焼本)  | ・ 改装表紙<br>・ 左肩無枠書題簽「千代襲媛物語」                   | 半 5巻1冊              | 無          |                                    | 無  | B  |
| 蓬左文庫 (紙焼本)        | 左肩子持枠刷題簽<br>「千代襲媛七変化物語」                       | 半 5巻6冊              | 無          |                                    | 有  | C  |
| 御茶ノ水女子大学          | ・ 濃灰色表紙<br>・ 左肩子持枠刷題簽 15・8×2.8<br>「千代襲媛七変化物語」 | 半 5巻5冊<br>22.5×15.6 | 無          | 自叙<br>19.0×13.6<br>本文<br>19.2×13.7 | 有  | C  |
| 早稲田大学             | ・ 黄土色表紙<br>・ 左肩子持枠刷題簽 15・7×2.8<br>「千代襲媛七変化物語」 | 半 5巻6冊<br>22.1×15.3 | 無          | 自叙<br>18.8×13.4<br>本文<br>19.2×13.6 | 有  | C  |

〔資料3〕諸本刊記  
 ●蓬左文庫本



●早稲田大学本

嘉永七<sup>甲</sup> 歳孟春

|                   |                      |         |
|-------------------|----------------------|---------|
| 江戸                | 小伝馬町三丁目              | 丁子屋平兵衛  |
| 三都                | 同 京橋彌左衛門町            | 大嶋屋傳右衛門 |
| 同                 | 馬喰町二丁目               | 菊 屋幸三郎  |
| 京都                | 三条通寺町西(入)            | 丸 屋善兵衛  |
| 同                 | 二条通堀川                | 越後屋治兵衛  |
| 書林                | 同 寺町五条上 <sup>ル</sup> | 山城屋佐兵衛  |
| 同                 | 三条通御幸町               | 吉野屋仁兵衛  |
| 大阪 <sup>(ヤ)</sup> | 心斎橋南久太郎町             | 秋田屋市兵衛  |

●お茶の水女子大学本

和漢西洋 書籍賣捌處

大阪<sup>(ヤ)</sup> 心斎橋博勞町角

群玉堂 河内屋岡田茂兵衛

のではなく、板(刷)の系統を考慮に入れることは必要であると考  
 える。一般的に同板か否かについては同一匡郭の欠損の有無によつ  
 て判断することが多いが、今回はそれに加え、巻一卷頭の口絵の差  
 異を考慮に入れ板(刷)の系統を提示したいと思う。

『千代襲媛七変化物語』巻一卷頭には、冒頭で触れた本書の直接  
 のモチーフである千代襲が歌とともに口絵として掲げてある(資料  
 4)。「千代襲媛七変化物語」の挿絵の特徴のひとつである薄墨を  
 ふんだんに用い、底脱<sup>そめけ</sup>の井の傍らで桶を頭に戴いている千代襲の  
 背後に満月を白く浮き上がらせ、歌の世界を巧みに描き出している。  
 九大本のこの口絵をA系統とする。

次に中村幸彦先生の旧蔵本の当該箇所を見てみると、九大本では  
 裾の辺りまでであった背景の薄墨が千代襲の肩までしかなく、肩より  
 下は白色になっている。肩より上部には薄墨を用いているので満月  
 は見えているが、月を浮き上がらせる為に薄墨を残したともとれる  
 中途半端な薄墨の使い方である。これをB系統とする。同じ系統の  
 口絵には他に八戸市立図書館本がある。

次に蓬左文庫本であるが、千代襲の背後には薄墨が全く使われて  
 おらず(薄墨板が省かれ)白色である。その為、千代襲のこの口絵に  
 は不可欠であるはずの月が消え、背後の望月を失った千代襲はどこ  
 か寂しげに居場所を失ってしまっている。これをC系統とする<sup>注1</sup>。  
 この系統は他にお茶の水女子大本・早稲田大学本がある。

〔資料2〕諸本対照表にこの口絵の系統を示しているが、そのまま  
 3種類の異なる「刷」が存在するということを示していると考えて  
 よいだろう。中野三敏先生は読本の後印本の傾向について次のよう  
 に述べている。

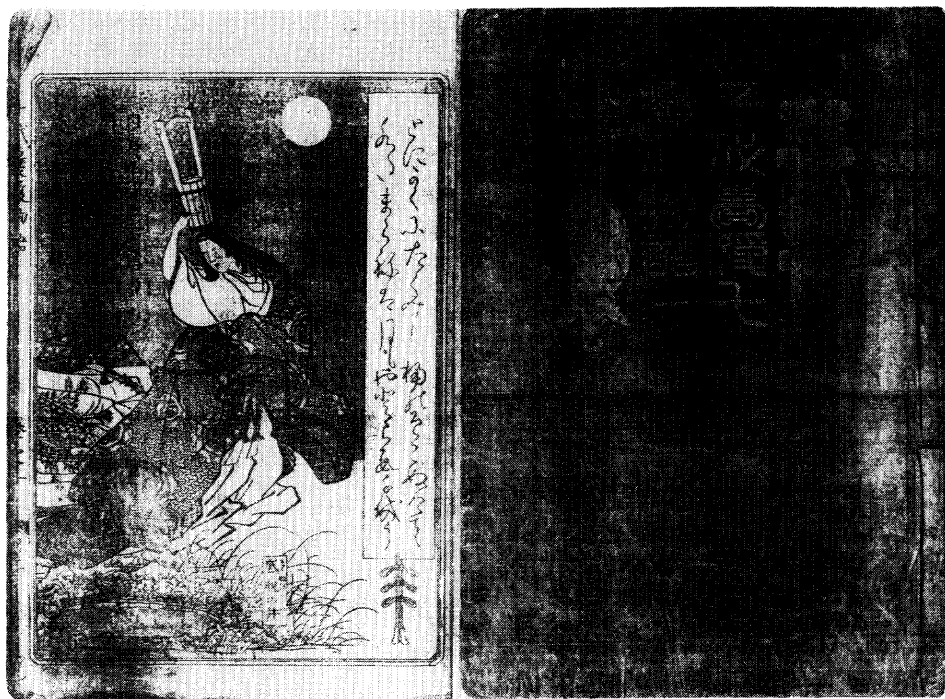
求板本は、元来営業上の利益をあげるために資本投下して購求したものなので、出来るだけ余分な手を加えず、簡略化し得る所は簡略化して、少ない投資で多くの利益をあげようとする。

（中略）読本などは、奥付をうんと手を省いて、半丁ほどに単なる書肆名連記のみをつけたりするのが通例だが、更に口絵の薄墨板などを省いてしまう例も極めて多い。従って逆に読本の場合は、手の込んだ奥付があつたり、口絵に薄墨や艶墨板が多量用してあつたりした場合は、初板本と認定してよい場合が多々あることになる。（中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』二九四頁 岩波書店 一九九五年）

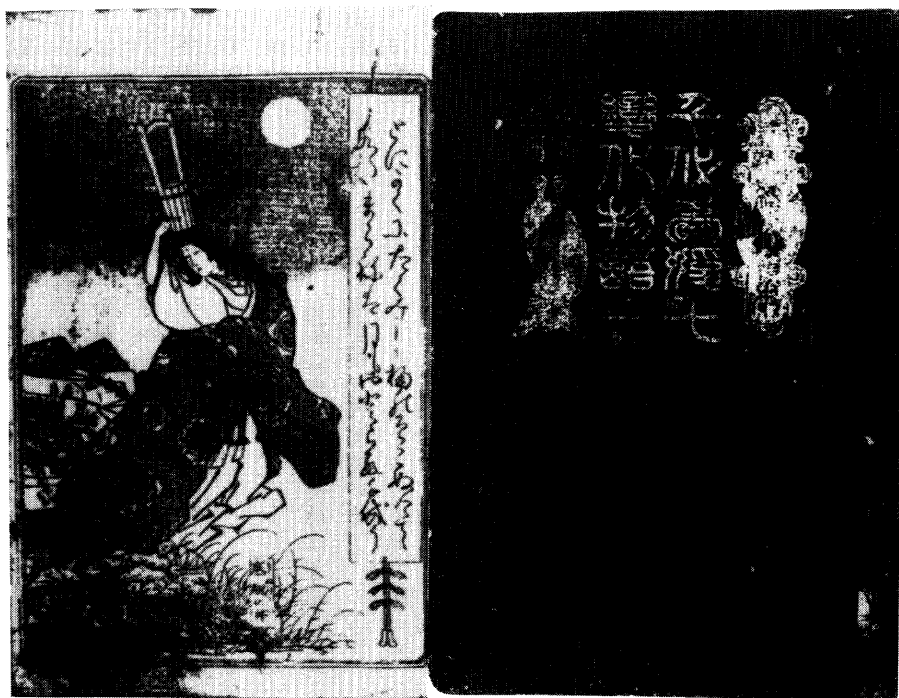
ここで指摘されているように、口絵の薄墨は板の系統を示すのみならず、板の先後関係をはかる上で一つの重要な要素となりうるのである。以下、刊記・口絵などを考慮に入れて諸本の関係について述べてみたいと思う。

まず、中村幸彦先生の旧蔵本であるが、榎山氏が初印本ではないかと考えられた如く、表紙・見返し等のみならず匡郭の欠損箇所もほぼ九大本と同一である。しかし、奥付がなく口絵においても九大本とは異なるB系統に属し、刷の状態も九大本より落ちる。これらを以てやはり初印であるとは言いがたく九大本の後印本であるといえるだろう。同じ板の系統に属するものとして八戸市立図書館本がある。八戸市立図書館本は改装され見返しもなく、さらに一冊に合冊されるなど異なる点が多くあるが、九大本と同様の匡郭の欠損箇所を有し、中村幸彦先生本と同じく九大本の後印本と考えてよいだろう。

●（資料4）表紙および巻一3丁表口絵（口ノ三）  
A系統（九大本）



● B系統（中村幸彦先生旧蔵本）



● C系統（蓬左文庫本）



次に、蓬左文庫本であるが、高木元氏が嘉永六年板として言及したものである。先に中野三敏先生が指摘された、薄墨板の省略と書肆名連記の奥付という後印本の特徴を持っている。巻冊は九大本と異なり五巻六冊（巻二が分冊）である。また、匡郭の欠損箇所について、九大本とは異なる箇所が多いものの同一箇所があり、九大本の後印本であることは間違いない。同じ系統として、棚橋氏が嘉永七年板として指摘された早稲田大学本があり、巻冊は五巻六冊（巻一が分冊）、口絵はCの系統である。これも九大本の匡郭欠損と同一のものがある。また、早稲田大学本の奥付は蓬左文庫本のそれを用いし、明らかに刊年のみを彫り代えている。

お茶の水女子大本については、九大本の匡郭欠損と同一箇所欠損が見られ同板であるが、非常に刷が粗雑であり、奥付には刊年が記されていないが大坂書林河内屋茂兵衛の手によって売り出されていることを考慮に入れると<sup>注2</sup>、文政期以降、求板し再印したのではないかと考えられる。また、蓬左文庫本・早稲田大学本と同様にC系統に属している。

## おわりに

以上、諸本を比較した結果、現存する『千代曩媛七変化物語』は匡郭の欠損から板の系統は一つであると思われる、板を彫り直した再刊ではなく、諸本すべて一つの板木を以て再印を繰り返したものである。そしてその初印本は、表紙・刷の状態・奥付・口絵の薄墨板

等の面から判断してやはり九大本である。後印本の先後関係としては初印本の次に中村幸彦本が刷られたと考えられ、蓬左文庫本と早稲田大学本はそれぞれ嘉永六年・七年に刊行されたのであろう。

お茶の水女子大学本は刊年不明であるが、京・江戸の板木を大量に買取し、幕末大坂書林としてもっとも隆盛を誇った河内屋茂兵衛による板行であることを考慮に入れると<sup>注3</sup>、おそらく嘉永七年以降に求板・出版したのではないかと推測される。

それにしても薄墨版の省略によって千代曩の月を消してしまうことが千代曩の口絵自体の意味のみならず、『千代曩媛七変化物語』全体のモチーフを喪失してしまうということに、後印本の板元達は当然気付いていたはずである。しかし、幕末の商業主義はそれを省る余裕を欠いていたらしい。

## 〈参考 九大本書誌〉

千代曩媛七変化物語 半紙本五巻五冊 九州大学附属図書館蔵

〈読本Ⅸ―1／文化4／シ―115〉

表紙 橙色（原）。縦二十一・九×十五・九糎。

題簽 原題簽無辺中央「千代曩媛七変化物語一（五）全部五冊」

（縦九・七糎横十・八糎）。



構成 卷一 見返し（半丁）、序（二丁）、題言（二丁）、口絵（四丁半）、目次（半丁）、本文百十四丁半（卷1 二十一丁、

卷2 二十七丁半、卷3 二十一丁、卷4 二十五丁、卷5 二十二丁半）、「千代曩尼本伝」一丁半、「振鷺亭主人著述書目」半丁、奥付半丁、以上、全百二十四丁半。

内題 「三国小女鵬孝記／玉谷眞平忠義傳／出邑震平懲惡傳 千代曩媛七変化物語」

柱刻 「千代曩媛物語 卷之一（五）（丁数）」

丁付 卷一 序「口ノ一」、題言一丁「口ノ二」、口絵四丁半「口ノ三」、目次「口ノ七」、本文「一」〜「二十一」。

卷二は本文に「一」〜「二十八」。

卷三は本文に「一」〜「二十一」。

卷四は本文に「一」〜「二十五」。

卷五は本文に「一」〜「二十」、「千代曩尼本伝」に「二十一」

作者 振鷺亭主人

序者 振鷺亭主人

画者 蹄斎北馬

匡郭 四周单边。縦十九・三纏横十三・六纏。半丁十一行每行三十三字前後。

挿画 卷一口絵（口ノ三才〜口ノ七才）

卷一見開二面（四ウ五才、九ウ十才、十三ウ十四才、十八ウ十九才）

卷二見開二面（三ウ四才、八ウ九才、十三ウ十四才、十八ウ十九才、二十三ウ二十四才）

卷三見開二面（二ウ三才、七ウ八才、十二ウ十三才、十三ウ十四才、十八ウ十九才）

卷四見開二面（二ウ三才、五ウ六才、十ウ十一才、十五ウ十六才、二十ウ二十一才）

卷五見開二面（四ウ五才、九ウ十才、十二ウ十三才、十四ウ十五才、十六ウ十七才）

目録題 なし

尾題 「千代曩媛物語」

刊記 「惟文化四年丁卯編成同五年戊辰 春正月發兌

江都 江戸橋四日市街 西宮彌兵衛

書肆 江戸橋四日市街 石渡利助梓行

広告 卷五末に「振鷺亭主人著述書目」として「妹背山緒環策子」

十卷「春徳鷹誓車」五冊「茅蝸物語」四冊「浄藏貴所神通傳」

六冊「坂東順禮女敵討」四冊「鯉魚箱根地獄」二冊「三庄太

夫／事蹟考 栗の小鳥」五冊「奇譚八幡不知森」二冊「夏祭

水滸伝」五冊「伊勢與日向物語」二冊を「右戊辰年間脱稿令

發鬻者也」と広告する。

蔵書印 なし

## 注

1 この薄墨板の省略は千代龔の口絵だけではなく、巻一・十八丁ウ十九丁オ、巻二・十三丁ウ十四丁オ、巻四・九丁ウ十丁オ、巻五・九丁ウ十丁オなどの挿絵の薄墨板が省略されている。

2 浜田啓介氏は「近世後期に於ける大阪書林の趨向―書林河内屋をめぐって―」（『近世文芸』第三号昭和三十一年 日本近世文学会）において、河内屋系統の書林、特に河内屋茂兵衛の文政以後における出版活動について詳細に論じ、河内屋茂兵衛を代表とする幕末の大坂書肆は自前の開板企画よりも江戸・京などの他店の出版物の板株を買い求めて自家の所有としてその増刷りによる板賃（板木使用料）収入によって安定した経営を図ったことが説明されている。

3 注2 浜田論文二十六頁参照。

〔付記〕 本稿は、日本学術振興会の研究助成および平成十二年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（かめい しん・九州大学大学院博士後期課程）